

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520711

研究課題名(和文)日本語を母語とするドイツ語学習者の語順および冠詞の習得とフィードバックの役割

研究課題名(英文) Acquisition of the German word order and article system by Japanese learners of German and the role of feedback

研究代表者

星井 牧子 (HOSHII, Makiko)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：90339656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本語を母語とするドイツ語学習者の語順と冠詞の習得について、大学でドイツ語を学ぶ中上級レベルの学習者114名による作文(593テキスト、89,122語)を用いた調査を行い、習得の際の要因を考察した。語順および冠詞ともにエラーからいくつかのパターンが抽出された。エラーの要因としては、母語干渉およびドイツ語に内在する語彙的・統語的複雑性による影響が考えられ、特に後者は学習環境とは話しことばのインプットの影響を示唆している。

フィードバックの役割については、発話思考法およびインタビューを用いて調査を行い、理解プロセスはフィードバックのタイプおよび学習者により大きく異なることが観察された。

研究成果の概要(英文)：This research investigated the factors that influence the acquisition of the German word order and article system by Japanese learners of German as a foreign language. 593 written texts (89,122 words) of 114 university students who learn German at the intermediate level were collected and analysed. We identified certain types of errors, both for word order and article usage. The analyses result in hypotheses for explaining different error types, such as transfer from L1, lexical and syntactical complexity of the target language, transfer from input in spoken German, and influences through learning environments.

As for as the role of feedback, 7 Japanese learners of German were included in a sub-study using the methods of think-aloud and interview. It was observed that the processes of understanding feedback comments on their own written texts depend on the types of feedback and learners' individual differences.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：外国語教育 ドイツ語教育 第2言語習得 文法習得 誤用分析 冠詞習得 語順習得

1. 研究開始当初の背景

日本のドイツ語教育においては、文法が占める比重が従来から高く、教科書や授業実践も文法シラバスに沿っていることが多い。こうした状況にもかかわらず、日本語を母語とするドイツ語学習者を対象にした文法習得の調査研究は少なく、実際に学習者がどのように文法を習得しているか、何ができるようになり、どこで難しさを感じているかについては、依然として研究蓄積が不十分である。

ドイツ語の語順習得について出発点となった研究は「自然な」環境下での第二言語習得過程を扱ったもので、Pienemann (1998) の処理可能性理論 (Processability Theory) がその代表にあげられる。その後行われた語順習得に関する調査や Griebhaber (2010) の Profilanalyse なども、子どもの第 2 言語習得を扱ったもの、フランス語や英語を母語とする学習者に関する調査が多く、研究開始当初、日本語を母語とする学習者については、研究代表者による横断的調査、研究分担者によるエラー分析が見られるだけであった。また冠詞の使用も日本語を母語とするドイツ語学習者にとっては難しい文法項目であるが、研究分担者によるエラー分析の他、これまで大きな調査は行われていなかった。学習者の作文に対するフィードバックの効果については、英語教育を中心にさまざまな調査が行われているが、この分野においても日本語を母語とするドイツ語学習者に関するものは乏しい状況であった。

このように、研究開始前および研究開始当初はドイツ語教育研究では国内外を問わず、日本語を母語とする学習者の語順および冠詞の習得とフィードバックの効果を調査した研究はまだ少なく、本研究は研究代表者および研究分担者が行ってきた研究を補足・発展し、ドイツ語習得研究全般に対し寄与するものとして構想された。

2. 研究の目的

本研究では日本の大学でドイツ語を学ぶ学習者を調査対象とし、語順および冠詞使用の習得を分析することにより、語順および冠詞の使用にみられるエラーのパターンを抽出し、学習の際に影響する要因を考察することを目的とした。日本国内のドイツ語教育における語順および冠詞の指導・規則提示のあり方を再検討するための知見を得ることに加え、ヨーロッパ系言語を母語にした学習者や目標言語圏での学習を中心とした先行研究を補足し、教科書や学習用文法書の記述を再検討するための基盤を提供できると考える。また、作文に対するフィードバックの理解プロセスを学習者の視点から考察することで、アウトプットに見られる言語的側面と併せて、学習者の視点から見た難しさも含め、学習プロセスを包括的にとらえようとするものである。

3. 研究の方法

本研究では学習者が書いたドイツ語作文を調査・分析した。収集したデータは 114 名による 593 テキスト (計 89,122 語) そのうち分析に用いたのは 93 名による計 306 テキスト (48,565 語) であった。テーマ毎の分析方法は以下の通り。

(1) 語順に関する調査:

中・上級者 29 名による 242 点のテキスト (39,046 語) を用いて、語順のうち特に先行研究の多い定動詞の位置に着目して、エラータイプを抽出した。うち 4 名については、比較のため口頭での発話も分析した。使用した口頭発話はドイツ語話者とのディスカッション場面での発話で、録画データを文字化した上で分析を行った。作文・口頭発話のいずれにおいても、前域の文要素から予想される定動詞の位置が目標言語の文法規則に則った形で実現されているかについて分析した。その際、先行研究のうち Pienemann の処理可能性理論 (1998) および Griebhaber の Profilanalyse (2010) の習得順序との比較も行った。

(2) 冠詞習得に関する調査:

初学者 53 名を含む計 88 名 243 点のテキスト (39,170 語) を用いて、自由作文における冠詞使用がどのように実現されているかを分析した。また、作文データの分析から抽出されたエラータイプをもとに、冠詞規則に関する知識を問うテスト (選択肢式) を 2 種類作成し、初学者用 (22 項目) は 64 名、中・上級者用 (48 項目) は 24 名の学習者に対して実施した。

(3) フィードバックに関する調査:

語順の分析に用いた作文を書いた学習者 29 名のうち 7 名に対して、発話思考法およびインタビューを用いて、フィードバックの理解プロセスを調査した。あわせてエラータイプとフィードバックのタイプ、および学習者によるフィードバック後の修正の有無についても分析を行った。

4. 研究成果

(1) 語順習得について:

中・上級レベルの学習者 29 名による作文 (39,046 語) を、定動詞の位置について分析した結果、前域 (Vorfeld) の使用、倒置 (INV)、副文に於ける定形後置 (V-END) のすべてにおいて、90% 以上が目標言語に即した形で使用されていた。学習者毎の分析でも、29 名 723 名が 80% 以上を正しい形で使用していた。Pienemann の処理可能性理論で提唱された習得順序で考えると、この 23 名の学習者は習得の最終段階にあると考えられる。ただし、先行研究で中心的な役割を果たす処理可能性理論では倒置 (INV) よりも定型後置 (V-END) の習得が後になると考えられてい

るが、29人中、定型後置(V-END)よりも倒置(INV)の実現率が高かったのは9名で、残りの20名は定型後置(V-END)の実現率のほうが高く、本研究の調査では、先行研究の処理可能性理論が提唱し、多くの調査で確認されている習得順序とは必ずしも一致しない結果となった。本研究で扱ったデータは横断的調査によるものであり、縦断的調査による習得プロセスを扱っていないこと、また先行研究とはデータの種類や学習環境が異なるため単純な比較はできないが、処理可能性仮説に基づく習得順序のある段階に達しても前の段階のエラーが起きないわけではなく、学習者の母語の他、学習環境とそれによるインプットが何らかの形で影響しているのではないかと考えられる。

次に定動詞の位置に関するエラーを含む321例のみを分析したところ、その59.8%が倒置(INV)に関するもので、定形後置(V-END)に関するエラーは35.8%であった。倒置(INV)に関するエラーは80%近くが前域に関するものであり、前域に副文がおかれたり、複数の要素が前域におかれたり、単独では前域を占めることのできない要素のみになるエラーが見られた。分析結果から、定動詞の位置に関するエラーには、母語干渉、目標言語のドイツ語に内在する語彙的・統語的複雑さ、ドイツ語の話し言葉の影響、表現内容の複雑さによる認知的処理と注意にかかる負荷などの要因が働いているという仮説が得られた。

定動詞の位置に関する先行研究では、口頭発話の分析と作文の分析とが混在し、比較が容易でない。そのため本研究では、29名のうち4名の学習者について、口頭発話データを用いた調査も行った。4名とも作文データの分析では、倒置(INV)、定型後置(V-END)ともに90%以上、うち3名についてはほぼ100%が正しく実現されており、いずれも習得段階に差異はなかった。口頭発話においては実現率が若干下がり、2名は倒置(INV)、定型後置(V-END)のいずれも90%台であったが、残り2名のうち1名は倒置(INV)が84.5%に対し、定型後置(V-END)が97.4%、もう1名は倒置(INV)が64%、定型後置(V-END)が86%であった。4名とも倒置(INV)の習得度合いのほうが低いという点では作文データの分析結果とも一致しており、口頭発話データからも先行研究とは異なる結果が見られた。さらに口頭発話で倒置(INV)の実現率が下がった2名は1年間の長期留学の経験者だという点は特に興味深い。今回は分析した学習者数が少ないため一般化はできないが、ドイツ語が使用される環境での話しことばからのインプットによる影響という観点から、今後、新たに調査を行う必要があると考える。

(2) 冠詞習得について：

学習者の作文調査からは、以下の分析結果が得られた。

初級(CEFRのA2/B1)レベルの学習者 49

名による作文(映画ストーリーの説明、49点、計6,824語)では、冠詞に関するエラーのうち、定冠詞の過剰使用が67.9%と最も多く、冠詞の省略は20.5%、不定冠詞の過剰使用は10.7%であった。それに対し、同じ映画ストーリーの説明でも、中・上級(B1以上)レベルの学習者15名の場合(作文15点、計3,235語)冠詞の省略が55.6%と最も多く、次いで定冠詞の過剰使用が29.6%、不定冠詞の過剰使用は10.7%であった。中・上級(B1以上)レベルの学習者24名の作文(179点、計29,111語)ではさらにこの傾向が強くなるのが観察され、エラーの77.4%が冠詞の省略によるもので、逆に定冠詞の過剰使用は15.3%、不定冠詞の過剰使用は4.9%と下がっている。定冠詞の過剰使用については習得レベルだけでなく、映画ストーリーの説明というテキスト種の影響も考えられる。中・上級レベルの学習者に多く見られる冠詞の省略については、エラーの約7割において名詞の前後に修飾語があることから、当該の名詞が形容詞や前置詞句等により、意味的に規定されている場合に冠詞を省略していることが考えられる。

この傾向を検証するために実施した冠詞知識に関するテストでは、さまざまなコンテキストで3つのタイプ(無冠詞、定冠詞、不定冠詞)から正しいものを選択させた。初級レベルの学習者向けテスト(22項目)の正答率は7割で、エラーの内訳は冠詞の省略が46%、定冠詞の過剰使用が34.5%、不定冠詞の過剰使用が19.5%となった。もっとも正答率が低かったのは不定冠詞の使用に関する5項目であった。

一方、中・上級レベルの学習者を対象にしたテスト(48項目)では、無冠詞については75%以上、定冠詞・不定冠詞については80%以上の正答率となった。定冠詞または不定冠詞が必要となるコンテキストでは、名詞が単数形の場合は10%程度において冠詞の省略がみられ、複数形の場合は2割弱に冠詞の省略がおきた。無冠詞となるべきコンテキストでは、単数形・複数形ともに2割程度のエラーが起きている。また単数形よりも複数形において冠詞のエラーが多く、統計的にも有意であった。冠詞の省略については、形容詞+名詞の環境で省略が起きるエラーが多く見られたが、統計的な有意差は見られなかった。定冠詞・不定冠詞の別でみると、定冠詞については名詞が状況のみによって特定できる場合にエラーが多く、不定冠詞については抽象的な名詞の場合にエラーが多くみられた。また、中・上級レベルの学生の場合、冠詞の習得に関していくつかの傾向は見られるものの、エラーには個人的な相違も大きいことも観察された。さらに冠詞習得は名詞の単数形・複数形の習得と密接に関わることも明らかになった。こうした点については、今後、新たな調査を行い、明らかにしていく必要があると考える。

(3) フィードバックについて

作文に対するフィードバックについては先行研究でさまざまな議論がなされているが、学習者がどのようにフィードバックを理解しているかについての研究はあまりみられないことから、本研究ではフィードバックの理解プロセスに焦点を当てて調査を実施した。語順習得の分析に用いた作文を書いた学習者 29 名のうち 7 名に、それぞれ本人が書いた作文 1 点を用い、直接訂正とエラー・カテゴリーの提示の 2 種類の方法でフィードバックを与え、フィードバックを読んで理解するプロセスとフィードバックを読んだ後の修正プロセスについて、発話思考法とインタビューを用いて調査した。

フィードバックの理解プロセスでは、問題箇所の確認やコメントに対するコメント、新たな知識についての言及の他、解決策の模索や説明の試み、既得知識に対する言及など、さまざまな認知活動が確認されたが、どのような流れで理解プロセスがおきるかは、フィードバックのタイプだけでなく、学習者によっても異なることが明らかになった。また、カテゴリーによるフィードバックの場合、修正案が見つからない場合の振る舞いは、エラーのタイプによっても異なることが観察されている。なお、フィードバック後の修正活動において、修正の有無をエラータイプ毎に確認したところ、語順のエラーについては、直接訂正の場合は修正が起きないままのケースもあったが、カテゴリーによるフィードバックでは、何らかの修正がおこなわれていたことが確認されている。本研究の調査は数名の学習者に限られているため、すぐに何らかの結論を出すことはできないが、発話思考法およびインタビューによる調査の分析結果と併せて考えると、カテゴリーによるエラーの提示は、学習者自身が試行錯誤する機会を提供し、学習プロセスがより活性化される可能性があることを示唆すると考えられる。発話思考法により学習者自身の修正活動を分析することで、学習者が既得の文法知識をどのように用いているかを考察することが可能になると考えられる。こうした点についても、今後、さらなる調査を行い、知見を重ねる必要があるだろう。

以上、本研究では日本語を母語とする学習者のデータを元に、1) 語順、特に定動詞の位置の習得、2) 冠詞使用の習得、3) フィードバックの役割について、作文データの分析を中心として考察を行った。今回得られた知見を考察すると、学習者の習得段階および学習環境とそれに伴うインプットの変化がエラータイプに影響を与えていることが考えられる。今後は、特に留学による目標言語圏での滞在等を中心に、学習環境とインプットの影響をより詳しく調査する必要があるだろう。今回の考察結果をもとに、さらなる調

査を行うことで、語順や冠詞使用など日本語を母語とするドイツ語学習者にとって習得が難しいと考えられる文法項目の習得プロセスとそれに関わる要因を明らかにし、ドイツ語教育活動およびドイツ語教育研究全般に寄与することができるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Hoshii, Makiko. Schriftliche Fehlerkorrektur aus der Lernerperspektive – Wie Lerner schriftliche Fehlerkorrektur verstehen. In: Schart, M., Hoshii, M. & Raindl, M. (Hrsg.). *Lernprozesse verstehen – empirische Forschungen zum Deutschunterricht an japanischen Universitäten*, München: Iudicium, pp. 60-89, 2013 年。(査読あり)

[学会発表](計9件)

Hoshii, Makiko. Probleme der Analyse lernersprachlicher Produktionen – am Beispiel der Verbstellung in mündlichen Äußerungen japanischer Deutschlerner. Ein Diskussionsbeitrag. 研究集会「DaF 研究の可能性 — 理論・実証研究・方法論」2014 年 3 月 5 日・早稲田大学。

Lipsky, Angela. Die Artikelsetzung bei fortgeschrittenen japanischen Deutschlernern: Eine Datenuntersuchung und Diskussion zu den Schwierigkeiten der Lersprachenanalyse. 研究集会「DaF 研究の可能性 — 理論・実証研究・方法論」2014 年 3 月 4 日・早稲田大学。

Lipsky, Angela & Hoshii, Makiko. Schwierigkeiten beim Erwerb der Artikel bei japanischen Deutschlernern: einige Erklärungshypothesen. 25. DGFF-Kongress, 2013 年 9 月 25 日~28 日. アウグスブルク大学。

Hoshii, Makiko. Is V-END easier than INVERSION? Japanese students' acquisition of word order in German as a foreign language. EuroSLA23. 2013 年 8 月 30 日. アムステルダム大学。

Hoshii, Makiko & Lipsky, Angela. Transfer aus der L1 und/oder Einfluss des zielsprachlichen Inputs? Schwierigkeiten beim Erwerb der Wortstellung und des Artikelgebrauchs bei japanischen Deutschlernern. IDT2013, 2013 年 8 月 2 日. ボルツァーノ自由大学。

Lipsky, Angela & Hoshii, Makiko. Fehler als Indikatoren für Fortgeschrittenheit? – Eine Untersuchung zu Wortstellungs- und Artikelfehlern in schriftlichen Texten japanischer Deutschlerner. 日本独文学会春季研究発表会. 2012年5月20日. 上智大学.

Hoshii, Makiko. Der Erwerb der Wortstellung: Untersuchungen zur Vorfeldbesetzung und Verbstellung in Texten fortgeschrittener japanischer Lerner. 研究集会「DaF 研究における実証研究の可能性 — 学習者言語と学習プロセスの視点から — 」2012年3月31日. 早稲田大学.

Lipsky, Angela. Der Erwerb des Artikelgebrauchs: Untersuchungen zur Artikelsetzung in Texten fortgeschrittener japanischer Lerner. 研究集会「DaF 研究における実証研究の可能性 — 学習者言語と学習プロセスの視点から — 」2012年3月31日. 早稲田大学.

Hoshii, Makiko. Schriftliche Fehlerkorrektur aus der Lernerperspektive – Wie die Lerner schriftliche Fehlerkorrektur verstehen. 日本独文学会第17回ドイツ語教授法ゼミナール, 2012年3月19日, IPC 生産性交流センター、湘南国際村.

〔図書〕(計 0 件)
該当なし

〔産業財産権〕
○出願状況(計 0 件)
該当なし

○取得状況(計 0 件)
該当なし

〔その他〕
他機関との共催等で、以下の研究集会、講演会を企画した。

Prof. Dr. Bernt Ahrenholz (イエナ大学教授・ドイツ)、Prof. Dr. Martina Rost-Roth(アウグスブルク大学教授・ドイツ)、Dr. Miyoung Lee (韓国外国語大学講師・韓国)を招聘し、講演会および研究集会「DaF 研究の可能性 — 理論・実証研究・方法論」を開催。2014年3月4日・5日。早稲田大学。(企画・主催: 科研費基盤研究(C): 課題番号 23520711 「日本語を母語とするドイツ語学習者の語順および冠詞の習得とフィードバックの役割」、共催: 早稲田大学言語情報研究所、後援: ドイツ学術交流会)

Prof. Dr. Karin Aguado(カッセル大学・ドイツ)を招聘し、講演会を企画・開催。

2012年3月30日。早稲田大学。(企画: 科研費基盤研究(C): 課題番号 23520711 「日本語を母語とするドイツ語学習者の語順および冠詞の習得とフィードバックの役割」、主催: 早稲田大学文学部・文学研究科ドイツ語ドイツ文学コース、後援: ドイツ学術交流会、日本独文学会) Prof. Dr. Karin Aguado(カッセル大学・ドイツ)およびDr. Miyoung Lee(韓国外国語大学講師・韓国)を招聘し、研究集会「DaF 研究における実証研究の可能性 — 学習者言語と学習プロセスの視点から — 」を開催。2012年3月30日・31日。早稲田大学。(企画・主催: 科研費基盤研究(C): 課題番号 23520711 「日本語を母語とするドイツ語学習者の語順および冠詞の習得とフィードバックの役割」、後援: ドイツ学術交流会、日本独文学会)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

星井 牧子 (HOSHII, Makiko)
早稲田大学・法文学術院・教授
研究者番号: 90339656

(2) 研究分担者

リプスキ・アンゲラ (LIPSKY, Angela)
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号: 90348194

(3) 連携研究者

()

研究者番号: